

世代をつなぐ熊本の心

球磨郡深田村庄屋地区

高田 忠喜さん(59歳)

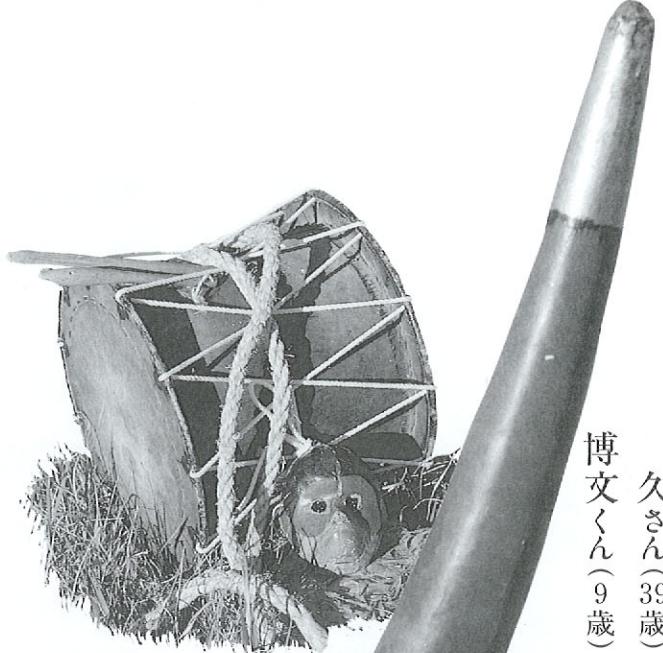
久さん(39歳)

博文くん(9歳)



伝説が生きる里。

庄屋の臼太鼓踊り



び細々と暮
らすようになつた
が、あまりにも変わり
果てた身の不運を嘆き、華
やかだつた昔を憶びつ

寿永の昔 壇の浦の合戦に敗
れた残党が、この山
奥の秘境へと
落ちの

白太鼓は、
代々その
家の長
深田村の

つ神前で唄い踊ったのが、この白太
鼓踊りであると言われる。

源平決戦を描くこの踊りは、頭や
脇、関ら兵士たちの重壮な踊りと、
子どもたちの哀切を帯びた鉦。そし
て、仮想の敵、仮鬼たちの滑稽な踊
りでくり広げられる。敵陣の偵察、
出陣、合戦、凱旋とストーリー
部で一時間もかかる長
丁場の演技である。

太鼓。そのあい間に打ち鳴らされる

「伊賀越中双六」にも歌われた球磨地
方には、平家の落人伝説にまつわる
臼太鼓踊りが、各地に残っている。
その中でも深田村のものは、最も特
色ある代表的な踊りのひとつである。

熊本からも、由緒ある伝統芸能が出

場した。球磨郡深田村庄屋の臼太鼓

踊りである。

「落ちゆく先は九州相良」と淨瑠璃

「落



男しか踊れない。つまり、この土地に生まれ育った生粋の庄屋っ子でなければ踊れない伝統ある踊りなのである。

高田忠喜さん、久さん、博文くんも、代々続く踊り手のひと組である。

練習は、ふつうみんなの仕事が終った夜8時から10時頃に行われる。長時間の踊りであるうえに、かぶとや太鼓ばかりの重量なので、大人

や太鼓はかなりの重音なので、大人の声援を受けながら、夏休み返上でがんばった。

厳しい練習とともに受け継がれた道具類にも、しっかりと年季が入っている。いま使っているかぶとは、百年以上もの歴史あるもの。何代もの村の男たちの汗が、このかぶとにしみている。

四方を九州山地に囲まれた、人吉盆地にある深田村。この静かな村に住む61世帯の小さな集落が、ひとつ保存会となってこの臼太鼓踊りを受け継いできた。それは、昔も今も、ここに住む人々の誇りであり、人々の心を結ぶ大切な絆でもある。

山々をバックに、地唄を唄う忠喜

さん。その唄に合わせて踊る久さんと博文くん。現在三代続いているのは高田さん親子だけだが、ほかにも、田山さん、上田さん、白柿さんなど、この村には親子の踊り手が、何組もある。村全体が、ひとつの文化財と言つていいのかも知れない。

勇壯だが、どこか切々たる哀愁を感じさせる不思議な魅力をもつこの踊り。歴史ある村の誇りを、これからも大切に守り続けてほしいと思う。

